江戸川乱歩と松野一夫
―二つの肖像画―

栗田　卓

旧江戸川乱歩邸の応接間には、江戸川乱歩の還暦を記念したとされる肖像画が飾られている。江戸川乱歩の還暦を記念した肖像画といえば、「別冊宝石」第七巻九号、通巻四二号（一九五四年十一月）の表紙を飾ったものが有名だろうが、応接間に飾られたものは「別冊宝石」のそれとは異なるものである。しかも、二つの肖像画を描いた画家は同一人物であるのだからそこに混乱が生じてしまう。

この二つの肖像画の作者こそ、松野一夫、本名松野一男である。一八九五（明治二八）年に、福岡県の小倉に生まれた松野は、一八九四（明治二七）年生まれの乱歩とは一歳違いで、小倉中学校を中退した後、洋画家・安田稔に師事し、一九二一（大正一〇）年に、帝展に初入選を果たす。同年より探偵雑誌「新青年」の表紙絵を担当することとなり、以降三〇年近く「新青年」の表紙、挿絵画家として活躍し、一九二三年（大正一二）年に「新青年」に「二銭銅貨」でデビューを果たした乱歩との関係をもつことになる。乱歩との関係はなにも「新青年」のみに留まったわけではなく、一九三一（昭和六）年に渡仏した松野は帰国後には「少年倶楽部」の表紙絵・挿絵なども担当し、一九四七（昭和二二）年より順次刊行された光文社版の『江戸川乱歩少年探偵シリーズ』全二三巻の装幀を担当するなど戦前・戦後を通じ乱歩作品の挿絵画家として活躍し、一九七三（昭和四八）年、乱歩の死去より八年後にこの世を去った。このように、松野一夫の画家としての人生はその大半を江戸川乱歩とともに歩んでいったことがわかる。

その松野一夫の手による乱歩の還暦記念とされる肖像画はどういった経緯で二つ存在することになったのだろうか。そのうち一枚の肖像画は、夢座海二が日本探偵作家クラブの会報に書いた文章に拠れば、一九五四（昭和二九）年一〇月三〇日に丸ノ内東京会館にて開催された乱歩の還暦祝いのパーティの席上で乱歩自身に直接手渡されたものである。「次は、城昌幸氏が代表する岩谷書店「宝石」からの、乱歩氏の肖像画であった。重役梅田氏令嬢が重そうに捧げるのを、永瀬三吾氏が補助して、乱歩氏にすすめる。「新青年」時代から探偵小説挿絵には馴染深い松野一夫画伯一カ月の労作である。これは舞台脇に散会まで飾られた。この絵柄は、当日土産物として配られた、宝石別冊「江戸川乱歩還暦記念号」の表紙と同様のものである。」（引用は『江戸川乱歩全集14探偵小説四十年（下）』（一九六〇〔昭和四五〕年五月、講談社）に拠る）

この記述に拠れば、ここで乱歩に「別冊宝石」の表紙と「同様」の還暦記念の肖像画が手渡されているが、しかし、仮にこの肖像画が「別冊宝石」の表紙とまったく同一なものであるならば還暦祝いのパーティでプレゼントされた肖像画は応接間に飾られている肖像画とは異なるもの、ということになってしまう。しかしながら、現在旧乱歩邸には「別冊宝石」の表紙と同一の肖像画は所蔵されていないのである。

となれば、この右下に「K.MATSUNO Oct 1954」とサインされた応接間の肖像画はいつどのような機会に描かれた肖像画なのだろうか。その答えは、一九六一（昭和三六）年七月に出版された初刊本である桃源社版『探偵小説四〇年』を、あるいは同書を原本として限定五百部のみ復刻された沖積舎版『探偵小説四十年』（一九八九〔平成元〕年一〇月）を見ると明らかになる。

（「別冊宝石」江戸川乱歩還暦記念号）

ここには、出版順では二番目になる先に参照した一九六〇（昭和四五）年五月発行の講談社版全集では掲載されなかった応接間の肖像画の図像イメージが本文中に挿入され、その横に乱歩自身によって次のようなキャプションがつけられている。

「還暦祝いで宝石社から贈られた松野一夫画伯の私の油絵肖像画。絵は縦七〇センチ、巾五〇センチ余の大きさ。客間に自分の肖像を懸けるのもへんだから、今は土蔵の廊下の壁にかけている。」

この記述が存在することで初めて、還暦記念に贈られた肖像画が「別冊宝石」の表紙を飾ったものとは別物であることがわかるのだが、一九六〇（昭和四五）年五月発行の講談社版全集を皮切りに「初出時の原文のまま掲載」をうたった江戸川乱歩推理文庫56『探偵小説四十年4』（一九八八〔昭和六三〕年四月、講談社）など多くの全集でこの部分がまるごと掲

（応接間の肖像画）

載されず、他方で夢座海二の「宝石別冊「江戸川乱歩還暦記念号」の表紙と同様」という記述のみが残されているために、夢座の曖昧な「同様の」という記述に引きずられることにより乱歩の還暦祝いに贈られた肖像画＝「別冊宝石」の表紙を飾ったものという認識が形成されていってしまったのではないか。

さらに言えば桃源社版、沖積舎版に存在する「別冊宝石」の図像イメージとその脇の乱歩の「宝石」の私の還暦記念号表紙。これも松野一夫さんの描いてくれた油絵から採ったものだが、祝いのときに送られた肖像画とは別のもの。この原画の方が小さい」というキャプションも多くの場合は掲載されていない。初刊本である桃源社版『探偵小説四十年』、限定五百部の沖積舎版『探偵小説四十年』ともに現在では入手は少々難しいために、最近まで乱歩の還暦祝いに贈られた肖像画＝「別冊宝石」の表紙という認識は再生産し続けられていた可能性が高い。

そのように考えれば、大衆文化研究センターの一般公開日に応接間の見学をする人々から寄せられる質問の中に、あの肖像画は還暦祝いのものであるのにも関わらず「別冊宝石」の表紙と異なるのは何故か、といった質問が一定数存在する理由も肯ける。

そこで、近年完結した光文社文庫版全集にてようやく肖像画の図像と共に乱歩のキャプションが復活したことの意味は大きいだろう。読者の認識が今後どのように変化するのかは現段階では未知数というしかないが、この仕事は少なくとも松野一夫という一人の画家の仕事に再度脚光を浴びせるという意味では大きな功績ではないだろうか。

ところで、何故松野はわざわざ乱歩の還暦祝いの肖像画を二枚描いたのかという謎だが、それに関する両者の言及は現段階では発見されていない。二千通近くある江戸川乱歩宛書簡の中にも、松野一夫からの手紙は年賀状しかなく、探偵小説家とこの挿絵画家の関係に関する研究は手探りでその端緒についたばかりである。

（立教大学大学院　前期課程修了）